



1. 公共事業でもPRが必要
2. もっともっと美しいものをつくりたい
3. このままでは何もつくれなくなる

1. 新東京国際空港のジェット燃料輸送パイプライン計画に対して、千葉市内6自治会が反対し、市が空港公団にパイプライン埋設工事を許可したことを不満として、千葉県および同市に対し行政不服審査を請求した。また、工事の一時停止仮処分申請等をも考えており、反対運動は法廷闘争に発展しそうである。

また、関西電力が福井県大飯町に計画している原子力発電所をはじめ、他の原子力発電所建設についても地元の反対が強いという。

これらの事業に反対する理由は、環境を悪くするとか、地域住民に利益をもたらさないとか、その他いろいろあるだろうが、共通していえることはパイプラインまたは原子炉自体の安全性に不安があるということであろう。

もちろん、地元住民に対しては、その安全性について十分説明がなされているであろうが、このようなことは地元住民だけでなく広く国民に対しPRする必要があるのではなかろうか。

今後、公共事業は、その目的や関係地域に対する影響とか、その内容について地元住民だけでなく、広く国民に理解され支持されなければ進めることはできないのではないかと。公共事業ももっとPRする必要があると思う。 [C]

2. むかしの土木構造物はただ機能に合った構造物ということだけでなく、一つの記念碑といった、みるからに重厚な感じを都市景観に与えているように思う。最近土木構造物の設計がその経済性に重点がおかれているせいか、社会資本としての美観に対する配慮が少ないような感がしてならない。

構造物は機能上最も合理的かつ洗練された設計によるものがいちばん美しいという考え方もあるが、われわれ土木技術者は、もっと周囲の景観に合うよう意識的な配慮をしても良いと思うのがかであろう。もちろん、少ない経費で多くの社会の要求にこたえるためには、経済性も重要であろうが、橋はすべて同じ形式で同じ色、道路は街路樹もない車が通るだけのアスファルト舗装といった規格品だけになってしまったら、なんとなく味気なくなる。

高速道路などでは景観工学も取り入れられているようだが、それも自動車に乗って運転をしている人を中心にした景観工学である。とくに都市土木においては、多くの人が土木構造物に愛着・親しみをもてるような美観工学を取り入れる必要があるのではないだろうか。 [J]

山陽新幹線が開通し、東京一岡山間が4時間あまりで結ばれることとなった。本線は、全国高速鉄道網の一環として昭和42年3月から建設が進められていたもので、これを契機として中国地方の経済はいっそう拡大していくものと期待される。

しかしながら、本線の沿線住民の環境に及ぼす影響を考えると、諸手をあげて喜んでいいのだろうかという疑問を禁じ得ない。公共事業において、個人の犠牲はある程度やむを得ないというものの、従来、経済開発優先のもとで、これが軽視されてきたきらいがないとはいえない。

円切り上げ等が問題になっている今日、産業開発のあり方とあわせて、公共事業の進め方について検討の余地があると考えられる。もちろん、先進諸外国に比し社会資本が低い水準にあるわが国にとって、公共投資は今後いっそうの進展が望まれるところであるが、問題はその進め方ないし計画に対する基本的考え方であろう。

従来、事業の効果は物的面を主体として論じられてきているが、今後は環境保全の要素も含めて考えなくてはならないであろう。さもないと、成田空港・新幹線にみられるように、公共事業そのものがゆきづまることになるであろう。 [S]